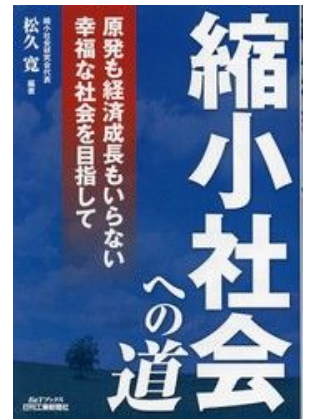


◇今世紀後半の高齢化・人口減少社会を透視する

今からもう一八年も前のことだが、衝撃的な一冊の本に出会った。マテリアル・ワールド・プロジェクト編『地球家族』（TOTO出版）。「申し訳ありませんが、家の中の物を全部、外に出して写真を撮らせて下さい」と断った上で撮影した、世界三〇カ国の人々の暮らしが紹介されている。例えば、最初の頁（ページ）には西アフリカのマリ共和国のナトマさん一家の写真。ナトマさんと奥さんと子供たち。なんとも和やかな表情でカメラに収まっている。そして家の前に並べられているのは、食器や壺（つぼ）や腰掛けなど、およそ四〇くらいの品目。これだけで家族九人の生活が営まれているのである。



頁を繰ると、次第に物の数が増えてゆく。スペイン、イタリア、ドイツ、イギリス、アメリカ……そして日本。品目数は、おそらく五百を超えているだろうか。人間がどこに写っているのか探すのが困難なほどだ。物を使っているというよりは、物に押しつぶされそうな気さえしてくる。いっそのこと、あり余るほどの物をそぎ落とし、もっとシンプルに、物に支配されるのではなく物を使いこなすような生活に組み替えることができないものなのか。そうした文脈で『縮小社会への道 10+ 件』を読んでみると、とても印象的である。小さな本だが、投げかけるメッセージは重い。

今から四年ほど前に、京都大学のメンバーを中心に「縮小社会研究会」なるものが結成されたのだという。GDPのプラス成長はもちろん、ゼロ成長でもなく、マイナス成長をこそ目指すのだという。地球上の資源存在量や環境制約を考えれば、いずれは「縮小社会」を本気で考えなければならぬと見るからである。そして本書には、「縮小社会研究会」の五人のメンバーの試論が繰り広げられている。ただし、画一的で統一的な見解が示されているというのではない。脱原発論、資源論、交通論、再生可能エネルギー論、技術論、日本経済縮小論、社会保障論等、こもごもに「縮小社会」の構想が語られている。